

2022 年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、2008 年度に初等部が開校して以来、初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携を取り、学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。2010 年度からは、幼稚園から大学院まで接続する学校園の先生方に、専門的な視点からのご意見を伺い、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。そして、創立 15 年目を迎え、昨年度、本校の 1 期生が大学を卒業しました。今後、次々と卒業生を送り出し、これから幼小中高の総合学院としての一貫教育の成果が試されることとなります。

2022 年度の初等部の取組は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導・学校行事」「生活指導」「研修（資質向上の取組）“Mastery for Service”の体現～個が活きる関わり合い～」の 4 項目を重点項目として設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童、保護者、教員にアンケートを実施し（回収率①児童 103.3%（重複回答があり 100%を超えた）、②保護者 91.1%、③教員 100%）、それぞれの立場からの回答を得ることにより客観性を確保するとともに、回答者個々の意見も重視するよう努めました。次に、アンケートの集計結果を分析するとともに、各重点項目についての初等部の取組状況を教職員が総括し、今年度の取組に分析、評価を加え、今後の改善の具体的方策を示し、初等部の自己点検・評価としました。さらに、それらについて接続する学校園関係者の関西学院中学部長、教育学部教授の専門的視点に基づくご意見を「第三者評価／学校関係者評価」とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）において、初等部の学校評価が協議・承認されました。初等部は関西学院がめざす世界市民の育成にむけた全人教育の土台を培う大切な役割を担っていることをしっかりと自覚し、子どもたちが生涯にわたって“Mastery for Service”の体現をめざしていけるよう、児童の個が活きる関わり合いを教員が深め、保護者の理解と協力を得て、より質の高い教育活動を展開しなければなりません。関西学院初等部として、本学校評価を真摯にとらえ、教職員一人一人が自らの課題を探り、組織としてその課題解決に向かって取組を進め、今後もさらなる改革を図ります。2022 年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより、社会的信頼を高めるよう努めたいと考えています。

2023 年 4 月 14 日
関西学院初等部
校長 大西宏道

学校評価

教育理念・使命・目標

【教育理念・使命】

キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一步」を担う。

【目標】

キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。

【初等部聖句】

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」

[意志]

[知性]

[情操]

2022年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育
初等部の教育の根幹をなすものであるため、評価項目として設定した。
- ・教育課程・学習指導・学校行事
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
- ・生徒指導
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているため、この項目を設定した。
- ・研修（資質向上の取組）
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

2022年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】	自己評価	A
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度はコロナ禍にあっても感染対策に注意しながら、毎日の朝の礼拝（こころの時間）、全学年週1時間の聖書科授業、特別礼拝、各宗教行事を土台にして、児童・保護者・教職員が建学の精神、スクールモットー“Mastery for Service”を共有し、様々な教育活動の中でキリスト教主義教育を展開することができた。 ・特に児童宗教委員会の活動が、コロナ禍においても昨年度より活発に行えるようになった。 ・様々な理由で欠席をしている児童がZoomにより、自宅からも礼拝に参加することができるようになった。 ・キリスト教主義教育の理念を保護者と共有する機会である全保護者対象の「聖書講座」（年3回開催）、PTA活動との連携による「聖書と讃美歌に親しむ会」（各学年ごとに年1回、計6回開催）を、すべて対面で実施することができた。 ・教職員に対しては「キリスト教研修会」を実施し、具体的な聖書の学びを通し 		

て、キリスト教の考え方や価値観を共有し、キリスト教主義教育の担い手として、どのように子どもたちと関わっていくべきかを考える機会をもつことができた。

(取組の効果に対する評価)

- ・児童アンケート問 4「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか。」に対する肯定的な回答は 94.1%であった。「こころの時間（朝の礼拝）」における讚美、祈り、聖書、メッセージの一つひとつ、また授業における聖書の学びを多くの児童が大切と感じてくれており、児童の中にキリスト教主義教育が深く浸透してきていることが分かる。
- ・児童アンケート問 5「“Mastery for Service”（マスタリー・フォア・サービス）を大切にすることを心がけて生活していますか。」に対する肯定的な回答は 87.4%であった。子どもたちが、“Mastery for Service”を体現する生活を心がけていることは、児童アンケート問 18、19、20、21、22 の肯定的な回答の割合が高いことから読み取ることができる。また一方で平均約 10%の子どもが否定的な回答をしており、この子どもたちが日々の生活の中で“Mastery for Service”を大切にすることを心掛けて歩めるために必要な手立ては何かを改めて考えていかなければならない。
- ・保護者アンケート問 5「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。」に対しては肯定的な回答の割合が 98.8%と昨年度よりも高い数値を示している。「聖書講座」をすべて対面で行うことができたこと、また学年ごとに開催している「聖書と讚美歌に親しむ会」をすべての学年で対面実施できた結果であると考えられる。
- ・保護者アンケート問 6「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が 92.5%と昨年度よりも高い数値を示しており、家庭においても子どもの姿から保護者がキリスト教主義教育が浸透していることを感じてくださっていることが分かる。
- ・保護者アンケート問 22「私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。」、保護者アンケート質問 23「私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している。」、保護者アンケート問 24「学校は、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が、それぞれ 100%、99.8%、95.2%と昨年度よりも高い数値を示している。この数値から保護者もまたスクールモットー“Mastery for Service”の精神とキリスト教主義教育に十分理解をし、肯定的に受け止めてくださっていることが分かる。
- ・いずれの質問に対しても、「強くそう思う」の割合が昨年度と比較しても大幅に増えていることから、保護者がキリスト教主義教育に対して肯定的に受け止めてくださっていることが分かる。
- ・教員アンケート問 1「私は、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している。」に対する肯定的な回答は 100%と全員が肯定的な回答をしており、続く教員アンケート問 2「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。」との質問に対しては肯定的な回答が 89.6%となっている。当然のことではあるが、教職員がキリスト教主義教育の理念を共有し、自らがキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもって初等部の教育の働きを担おうとしていることが分かる。
- ・教員アンケート問 3の「私は、「“Mastery for Service”（マスタリー・フォ

	ア・サービス)を体現する世界市民の育成」を意識しながら教育している。」との質問に対しては、肯定的な回答が100%と全員がスクールモットーを意識しながら、日々の教育活動を行っていることが分かる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・関西学院の教育の土台であるキリスト教主義教育をさらに浸透、展開していくために、まず教職員がその大切さを様々な機会に確認し共有しながら、児童や保護者と関わっていく。 ・アンケートの結果は昨年と比較しても全体的に肯定的な回答の割合が高かったものの、「強くそう思う」の割合が低くなっている項目もあり、「強くそう思う」の割合がより高くなるような努力・工夫を続けていく。 ・子どもたちが主体的に宗教行事や活動に取り組めるプログラムを、「例年通り」ではなく新たに計画し実施していく。 ・ホームページ、学校だより、学年だより、学級だよりなどの媒体を通して、在校生の保護者のみならず、入学を希望する保護者にもキリスト教主義教育の意味をより深く共有していく。

2022年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導・学校行事 【真理を探究する確かな学力の育成】	自己評価	B
目標	「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握の上の学習指導」「豊かな情操を育む芸術文化活動」を目指す。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期は40分授業の時程であったが、授業時間数確保の観点から、後期からは45分授業の時程に戻した。 ・新型コロナウイルス感染症の拡大予防に最大限配慮しながら、放課後遊びや金曜日の校内清掃、春の縦割り遠足などを再開した。 ・国語、算数、体育の教科部会を毎月実施し、評価の仕方や期末テストのあり方、体育祭の開催時期の検討などを行った。 ・昨年に引き続き、どのような資質・能力を育てていくのか、初等部内で共有し、校内の授業研修を行った。 ・新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みながら、2月に学校公開会を人数を限定して行うことにしている。 ・昨年に引き続き、臨時休業時や欠席が続く児童に対してオンライン授業を実施した。 ・新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みながら、5・6年生の宿泊行事を復活させた。 ・昨年度に引き続き、算数の単元テストならびに期末テストの内容について全体で議論し修正を図った。 ・学習の相対的な到達度を把握するための実力テストを実施した。また、学力不振児童については算数の補習を行い、学習習慣の定着と学力の向上を図った。 ・補習対象児童とは別に、中学部への進学を注意喚起するために学力不振の児童並びに保護者を対象に面談を行った。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケート問3「学校は楽しいですか。」では、肯定的評価が前年度89.5%から88.7%と0.8ポイント下回っている。これは、長引くコロナ禍の中、学校活動や行事を復活させているが、以前のように自由に活動できるものではな 		

	<p>いことが考えられる。しかし、児童アンケート問 9「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」においては、前年度 82.3%から 87.1%と 4.8 ポイントを上げている。このことは、友だちとの距離を保ちつつも、自由に自分の考えを伝えられる教室環境になってきたことが関係していると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケート問 15「タブレットを使って学習に役立てることが出来ますか。」では、前年度 93.7%から 97.1%と 3.4 ポイントを上げている。このことは、前年度から iPad を持つ環境整備がより整っただけでなく、より上手に授業に取り入れられ活用していることがうかがえる。 ・保護者アンケート問 10「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」では肯定的評価が 90.5%、保護者アンケート問 11「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」では肯定的評価が 88.9%と、共に前年度からポイントを上げている。身につけるべき基礎・基本的な学習内容の定着や、補習授業での学習内容の定着を図る取り組みに、理解を得られてきていると考えられる。引き続き教科部会において共有を図り、研修部と連携しながら授業研究を続けていくことで保護者の信頼をさらに上げていく。 ・保護者アンケート問 25「学校のコロナ禍についての対応は総じて適切であった。」では、前年度 80.8%から 88.0%と 7.2 ポイント上げている。このことは今年度は、感染症対策をしながら学校行事を復活させたり、授業参観や個人懇談会を複数回実施したりしたことで、保護者にとって初等部をより近いものと感じてもらえたからだと考えている。 ・教員アンケート問 3「私は、「Mastery for Service」(マスタリー・フォア・サービス)を体現する世界市民の育成を意識しながら教育している。」については、100%の肯定的評価となっている。我々のスクール・モットーである“Mastery for Service”の原点に立ち返り、他者と共に歩み、本当のやさしさと思いやりをもって自らを社会と人のために用いることのできる人を育成していくために、様々な学校行事等を通して子どもたちに意識づけできたと考えている。 ・英語については昨年度に引き続き、「毎日英語に触れる」ということを前提に、日本人教員、ネイティブ教員あわせて 8 人態勢で取り組んでいる。児童アンケート問 11「英語の時間の勉強はわかりやすいですか。」では 78.5%の肯定的評価で、前年度 78.2%からは僅かにポイントを上げた。昨年度に引き続き例年 6 年生で実施している CCT (カナダ・コミュニケーション・ツアー) が中止になったが、それに代わる TGG (東京グローバルゲートウェイ) に出向き、コミュニケーションスキルを表現する場を設けた。来年度はさらに子どもたちが英語に夢中になれる仕組みをつくっていく。 ・芸術教育について、児童アンケート問 14「音楽や図工は好きですか。」では、91.2%の肯定的評価になっており前年度 94.5%からは若干ポイントを下げている。しかし、保護者アンケート問 15「学校は、音楽、美術(図工)を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育てている。」では、肯定的評価が 95.7%になっており、これについては前年度 88.5%から大きくポイントを上げた。これらについては、中央講堂での音楽祭が開催できたことが大きな要因と考える。しかし、児童の評価が落ちたことに関しては、本来の形の活動が十分にできなかったことも考えられる。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策を行い見通しを持った学校行事の運営。(集団宿泊的行事・学芸的行事・体育的行事・遠足的行事など)

	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続いて中学部との連携の強化。(特に算数) ・昨年度に引き続き、子どもたちの資質・能力をどのように育てていくかを念頭に置きながら、子どもたちをどのように見取っていくかの議論の継続。(各教科単元末テスト、期末テストの在り方、評価の在り方) ・インドネシアとの交際交流の継続とさらなる充実。
--	---

2022年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	生活指導 【初等部に関わる全ての人々が楽しく幸せに過ごせる学校生活】	自己評価	B
目標	児童が社会の一員として責任ある態度を持ち、学校生活のきまりを守ることができるようにする。そのために、学年の発達段階に応じた自己判断を促すようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度同様、教員による立哨を下校時に行った。信号待ちの児童に、飛沫感染予防という観点で、これまでの「静かにする」という指導から「話さない」というようにポイント絞った指導を徹底して行うようにした。加えて、分散下校がなくなり、放課後の居残りも元に戻ったので、立哨の曜日を限定し、集中的に児童に下校指導を行えるようにした。 ・昨年度行った1年生と6年生によるペア下校を本年度も継続し、さらに2年生と5年生のペア下校も行った。6年生だけではなく5年生にも高学年としての意識を高めてもらい、児童が自分たちできまりを守っていくという意識をもてるようにした。 ・登校時、苦情の多い地点に絞り、学事委員会の教員が立哨を行った。 ・校長室会や教師会、朝の職員朝礼において、日々の生活指導の案件や児童の様子を教員に伝え、全員で生活指導に当たるという意識をもってもらえるようにした。 ・生活安全委員会の児童と連携して、休憩時間のグラウンドの使い方、校舎内での過ごし方、挨拶の仕方など、児童の自治で校内生活が豊かになるような工夫を行った。 ・避難訓練は水害(6月)、火災(11月)、地震(1月)の3回、様々な災害に備えて行った。地震避難訓練は、その日のうちのいつ訓練が始まるか分からない状況で実施し、不測の事態にどう対処すればよいか考えられる訓練とした。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <p>〈児童アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活指導の観点である「学校のきまりを守ること」について、児童アンケート問16「学校のきまりを守って生活していますか。」に対する肯定的な回答は87.4%(前年度89.5%、前々年度86.7%)であった。この項目に関しては前年度を2.1ポイント下回る回答を示しており、児童の意識の低下が見られた。本年度における指導の徹底の不十分さが示された。 ・生活指導の観点である「元気よく挨拶をすること」について、児童アンケート問17「だれにでも元気よくあいさつしていますか。」に対する肯定的な回答は89.3%(前年度88.7%、前々年度85.3%)であった。この項目に関しては前年度を0.6ポイント上回り、2年前と比較すると少しずつ増えてきている。コロナ禍以前は92.0%あり、それからすれば、まだ低い数値であることは否めないが、マスク生活に慣れてきたこともあり、その中でどうすれば気持ちの良い挨拶 		

	<p>撙になるかという教員の指導の成果であると思われる。</p> <p>〈保護者アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート問 17「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて、適切な指導をしている。」に対する肯定的な回答は88.1%（前年度 89.7%）であった。前年度に比べて1.6ポイント下回っており、児童アンケートの同様の項目の回答から考えて、児童の意識の低下が保護者にも伝わっていることがうかがえる。 ・保護者アンケート問 18「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」に対する回答は86.6%（前年度 81.9%）であった。前々年度の82.4%から考えても、「あいさつ」に関して、児童アンケートの上昇の結果を保護者も感じているものと思われる。 <p>〈教員アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケート問 13「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」、問 14「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」、問 16「私は、一人ひとりの子どもが安心して学校生活を送れるように、配慮、指導している。」の3つの質問に対して、昨年度はいずれも100%の肯定的な回答が見られたが、本年度は問 13 と問 14 について、一人の教員に否定的な回答が見られた。これは、コロナ禍での命の危機感を教員が同じ意識で子どもたちに向き合っていた結果であると同時に、全員が肯定的な回答になるように継続して呼びかける必要があると考える。また、児童や保護者における同様のアンケートに対する回答では、10ポイントから20ポイントの差があり、教員が十分に行っているという意識が児童や保護者に伝わっていない現状がある。 ・教員アンケート問 15「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」は、否定的な回答が6.9%あった。これは、指導を行ったが、十分にできなかったということと思われる。よって、十分に指導できるように、学年団や管理職に協力を得ながら、引き続き指導に当たる必要があると思われる。 ・感染者数の増加はまだ見られるものの、本年度の途中から通常の学校生活が送れるようになってきた。それに伴って指導の方法を変更せざるを得ないが、そのルールをしっかりと指導することの難しさを感じた。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校のきまりを守ること」に関しては、本年度の反省を踏まえ、教員の意識を統一させるために、校長室会や教師会で繰り返し児童の実態を伝えつつ、事前に全員で指導ができるようなアナウンスを増やしていく。教員からの指導と児童同士の呼びかけによる指導を併用しながら、さらに児童の意識を高められるように指導を行っていく。 ・「あいさつ」については、マスクの着用がいつまで続くのかわからない状況を踏まえ、マスクをしていても挨拶をすることで相手に気持ちを伝えられるようにしていくことの重要性を伝えるような指導を、児童同士の呼びかけも取り入れながら継続的に行っていく。

2022年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>研修（資質向上の取り組み） 【“Mastery for Service”の体現 ～「個」が活躍する関わり合い～】</p>	<p>自己評価</p>	<p>B</p>
-----------------------	---	-------------	----------

<p>目標</p>	<p>「他者と対話し共感する能力」を持ち「よりよい世界を創造」することが我々のミッションであり、“Mastery for Service”を体現する鍵となる。教員の対話と共創の場づくりを行い、教員の絶えざる変容によって、スクールモットーを体現する初等部の子どもたちの育成をめざす。</p>
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <公開授業> 各学年団の代表1名が授業公開する「大授業」を実施。事前検討会は学年で行い、事後研修会は全教員が参加。その他、全教員が一人一公開で「小授業」を行い、それぞれ実践記録を提出することとした。 ・ <キリスト教研修> 本校宗教主事によるキリスト教主義教育の講話を聞き、要点について整理した後、各学年によるグループ討議を行った。 ・ <危機管理研修> 本校養護教諭による救急措置や感染症対策に関する講話を聞き、日常でできる具体的対応方法を確認した。 ・ <読書会> 任意参加型で、幅広い読書体験を共有する場を提供した。不定期開催。 ・ 外部講師による「個別最適な学び研修」を対面で開催。「個」に応じた指導や支援に関する認識を深めた。 ・ 外部講師による「子ども理解研修」を対面で開催。「個」に関する理解や「個」を見取るということに対しての理解を深めた。 ・ <教科部会> 教務委員会と連携を図りながら教科部会を開催した。各教科についての理解（資質・能力、評価等）を深めた。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童アンケート問 15「タブレットを使って学習に役立てることが出来ますか。」における肯定評価が 97.1%(前年度 93.7%)と増えている。一昨年に導入された一人一台端末環境が整い、タブレット端末上で考えを共有したり、学習のまとめを進めたり、児童の授業の中での効果的な活用が多く見られた。教員アンケート問 12「私は、ICT 機器を有効に活用している。」の肯定的評価が 100%となっているように、教員による ICT 機器の活用の様子が、児童の活動の様子につながっていると考えられる。 ・ 児童アンケート問 23「困ったときに、友だちや先生に相談できますか。」が 58.0% (前年度 62.8%)と減少し低い値だと捉えられる。「強くそう思う」が 28.2%(前年度 30.3%)と減少し、逆に「まったくそう思わない」が 14.5%(前年度 10.7%)と増加している。相談できない児童の増加傾向が見られる。より一層安心感のある教室環境を整えると共に、個別に配慮する必要がある児童を見取るための研修を進める必要がある。 ・ 児童アンケート問 19「思いやりのある友だちが多いですか。」の「強くそう思う」が、55.2%(前年度 53.7%)と上昇している。反面、児童アンケート問 22「相手の気持ちを考えて行動することができていますか。」の「強くそう思う」も、32.2%(前年度 28.7%)と上昇している。優しくされていると感じ、自分自身も同じように行動しようとしている姿が想像される。学級経営や特別活動に特化した研修を進め、さらに児童間の関係性の向上を目指すべきだと考えられる。 ・ 保護者アンケート問 10「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」問 12「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。」では、それぞれ 90.5% (前年度 85.9%)、92.1% (前年度 88.8%)と高評価でさらに上昇している。また、保護者アンケート問 11「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」における肯定評価も 88.9%(前年度 85.9%)と上昇している。これは、ICT の使用による知識の活用場面を設けたり、ICT を学習活動の効果的な場面で積極的に使用したりするなど、

	<p>教員の授業の意識の変化や授業方法の工夫が影響していると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケート問 17「私は、研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している。」、問 18「私は、授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。」の肯定評価がそれぞれ 79.3%(前年度 90.3%)、79.3%(前年度 93.5%)と下降している。これは、本年度の研修テーマの抽象性や取り組み方の具体的な方法を示すことができなかつたことと考えられる。 ・教員アンケート問 22「学校のコロナ禍についての対応は総じて適切であった。」の「強くそう思う」が、69%(前年度 64.5%)と上昇し、肯定評価は100%となっている。各教員が授業支援クラウドアプリ「ロイロノート・スクール」等で細やかに児童への連絡、評価を行うことができた成果だと考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末が有効に活用される授業づくり研修を進める。 ・新学習指導要領における各教科のねらいや教科の本質的な解釈の具体化に、教務委員会と共同して取り組む。 ・他者からのフィードバックを得ることを通して自身の授業や実践を見なおす機会を設けるために、年間一人一授業公開を継続する。 ・客観的に分析的に連続的に児童理解を進めるために、児童の記録を取り続け、学年間で共有できる場を設定する。 ・オンライン等で外部講師を招聘し、学習者理解や学級経営、特別活動に関する研修を進める。 ・各学年における協働研究の場を設定し、計画的に進められるようにする。 ・研修テーマを明確にし、そのテーマに沿った対話を教員内で行う機会を設ける。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

<p>○毎日の礼拝、聖書科授業、聖書講座を土台に日々の教育活動を展開してきた。そのことが、児童と保護者のキリスト教主義教育に対する肯定的な評価につながっている。</p> <p>○新型コロナウイルス感染症予防に最大限配慮しながら、授業時間、休み時間、清掃時間などを以前の形に戻した。あわせて積極的にオンライン授業を行い、新型コロナウイルス感染症により長期欠席している児童の学習が停滞しないようにつとめた。児童・保護者ともに初等部の授業のわかりやすさを肯定的に評価している。本年度から本格的に実施した3年生以上の国際交流をさらに充実し継続していく。</p> <p>○児童自身がルール・マナーを守っていく意識を持てるように指導してきた。その中で、挨拶を積極的にしようとする児童が増えてきている。今後も教師の指導と児童相互のよびかけを併用しながらさらにルール・マナーを守ろうとする意識を高めていく。</p> <p>○キリスト教・危機管理・子ども理解・学級経営・ICTなど現在必要と考えられる内容に関する様々な研修を行ってきた。今後は教員の研修に対するニーズを受け止めつつ、具体的かつ計画的に研修を進めていく。</p> <p>○これまで同様、児童アンケート問 3「学校は楽しいですか。」、保護者アンケート問 4「初等部の教育には満足している。」で高い肯定的評価を得た。今後もキリスト教主義教育を土台とした全人教育を力強く進めていく。</p>

2022年度の評価をふまえて2023年度に予定している評価項目、テーマ等

- キリスト教主義教育
- 教育課程・学習指導・学校行事
- 生徒指導
- 研修（資質向上の取組）

第三者評価／学校関係者評価

全体として、コロナ禍以前の学校の姿に戻すために多大な努力が払われ、さらにその努力が成果をもたらしたことが、児童と保護者からの多くの項目における「強い肯定」の回答率上昇からうかがえます。その上で、「自己点検・評価」が誠実に行われた点が高く評価されます。

教科面では、算数をはじめとして基礎学力を全ての児童に定着させるための努力と工夫の跡が見てとれます。授業力を含む教員の資質向上を目指す研修活動は初等部の力点の一つであり、当年度も様々な研修が充実して実施されたことが高く評価されます。

ルールやマナーについての指導に関しては、児童がそれらを自分事として捉える主体性の涵養に留意しつつ、また、児童へのアプローチにおける各教員の個性を生かしながら、自己評価に記載されている「全員で生徒指導にあたるという意識」が更に醸成されることが期待されます。

“Mastery for Service”の実践に関して児童の否定的回答の割合が挙げられていますが、その実践に難しさを感じる子供なりの真摯な自己理解とも受け取れます。関学の精神を児童の心に種蒔く初等部の働きの尊さに改めて思い至ります。今後も、キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一步」を担い、関学の一貫教育の根幹を形成する役目を果たす初等部であり続けることを願います。

アンケートの結果については、全般的に良い状態を維持していました。項目によっては肯定的評価を下げたものもありましたが、各項目の評価結果の水準が高いことに、教職員による日々の研鑽を感じることができます。授業や休憩時間では、どの児童の表情にも明るさや積極性を見てとることができました。キリスト教主義教育、教育課程・学習指導・学校行事、生徒指導、研修等の取り組みが充実しているのだと思われまます。

児童を対象としたアンケートでは、問9「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか」において肯定的回答が(82.3%→87.1%)、「英語」の時間は好きですか。」は(69.2%→71.9%)という値になっており、高く評価できます。保護者のアンケートにおいても、問13「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」の肯定的回答が(73.7%→84.8%)と上昇しているため、初等部の英語教育が高く評価されていることがわかります。

一方、児童を対象としたアンケートの結果の中には、問3「学校は楽しいですか。」に対する肯定的評価がこの3年で(93.1%→89.5%→88.7%)へと下降し続けていること、他にも、問6「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」の肯定的回答が(93.9%→92.7%)、問7「授業は楽しいですか。」の肯定的評価の回答がこの3年で(92.8%→90.9%→88.8%)、問8「授業はわかりやすいですか。」の肯定的回答が(91.8%→88.8%)とあるように、肯定的な評価を下げた項目がありました。早急に検証して対応する必要があります。

また、児童を対象としたアンケートの中で気になるのは、問23「困ったときに、友だちや先生に相談できますか。」という問いに対する回答結果についてです。肯定的回答が(62.8%→58.0%)と下降したことと合わせて、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」の合計の否定的回答は、この3年で(34.4%→37.1%→42.1%)と上昇しています。昨年度も指摘しましたが、この否定的回答の上昇から、児童には「相談できる側」と「相談できない側」の二極化が進行していることが指摘できます。以前よりも相談できるようになった児童には継続して励ましつつ、未だに相談ができない、あるいは相談の仕方がわからない児童には教職員で声をかけ、共有していくことが必要です。コロナ禍においては「家族」というプライベート空間が生活の中心となり過ぎる傾向があり、児童にとって相談できる場や相手が失われがちです。児童が気軽に相談できる環境づくり（組織としての学校づく

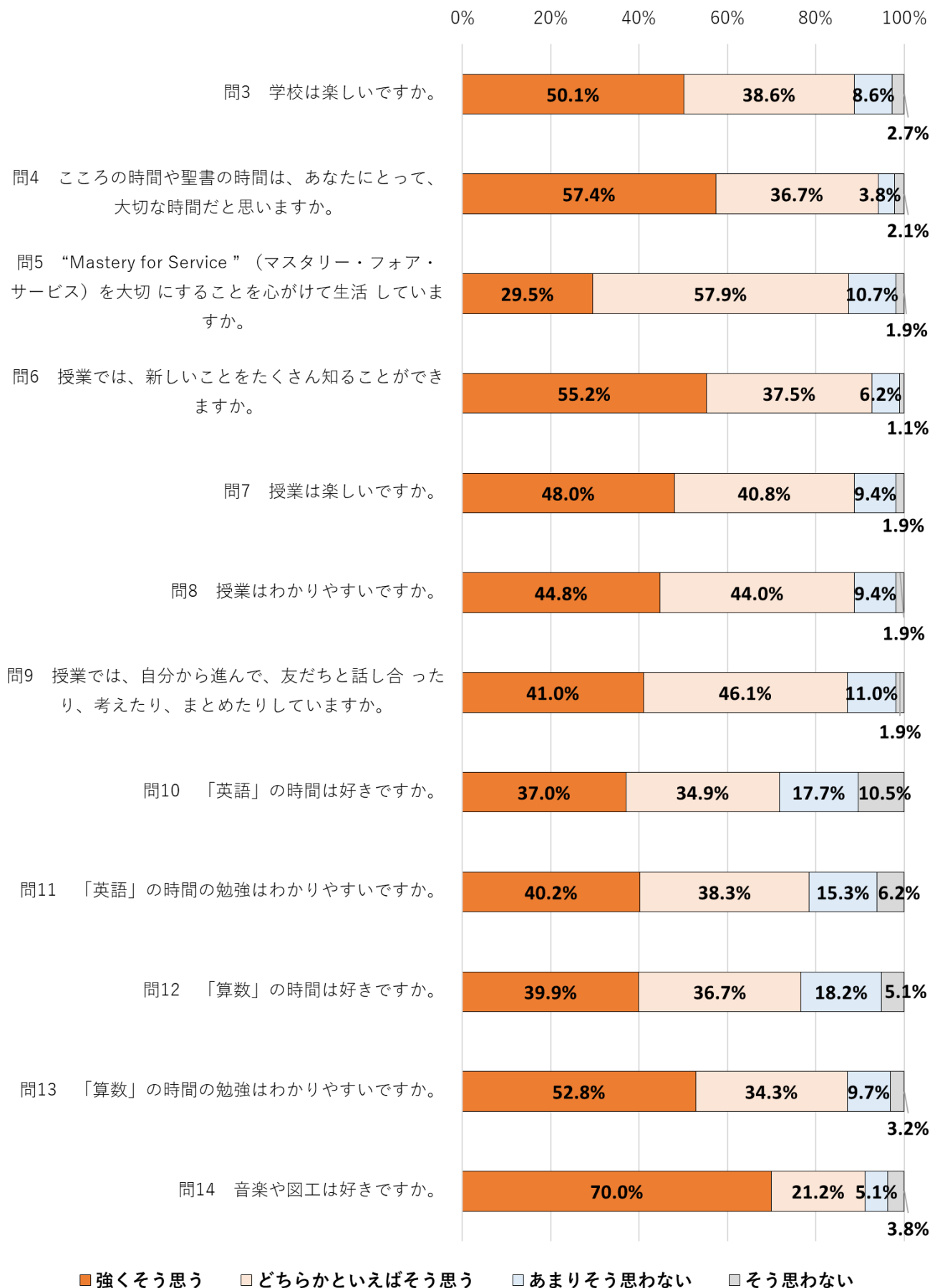
り) と、児童の相談できる力や他者からの相談を受けとめる力を育てる学級経営や授業づくりのあり方を検討した上で、実践し、その効果を検証する必要があります。

2022 年度学校評価

2022年度 学校評価アンケート集計結果

初等部・児童（回答率 103.3% 回答373人/対象361人）

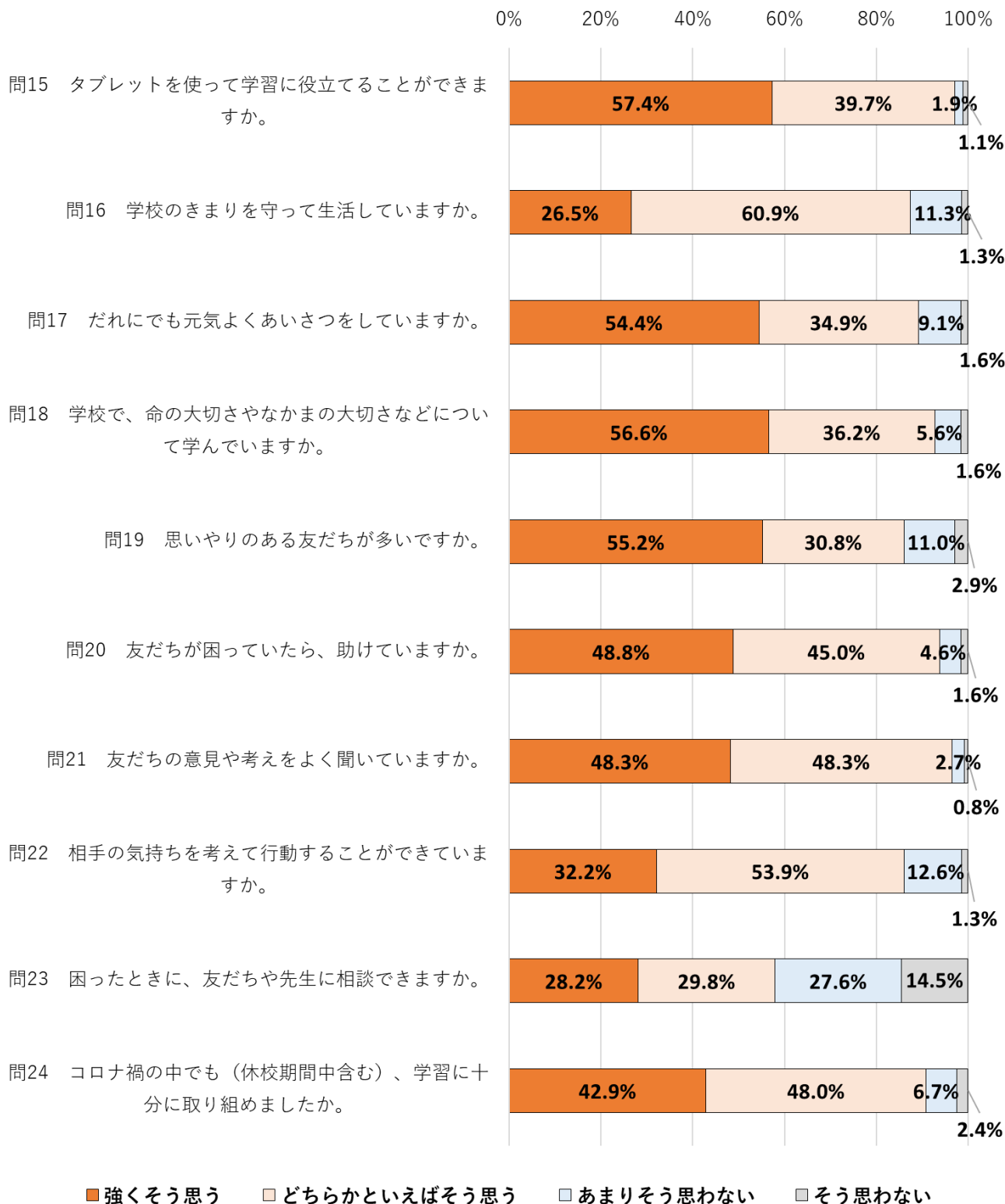
※複数回答いただいたケースがあり、100%を超える回答率となっています。



2022年度 学校評価アンケート集計結果

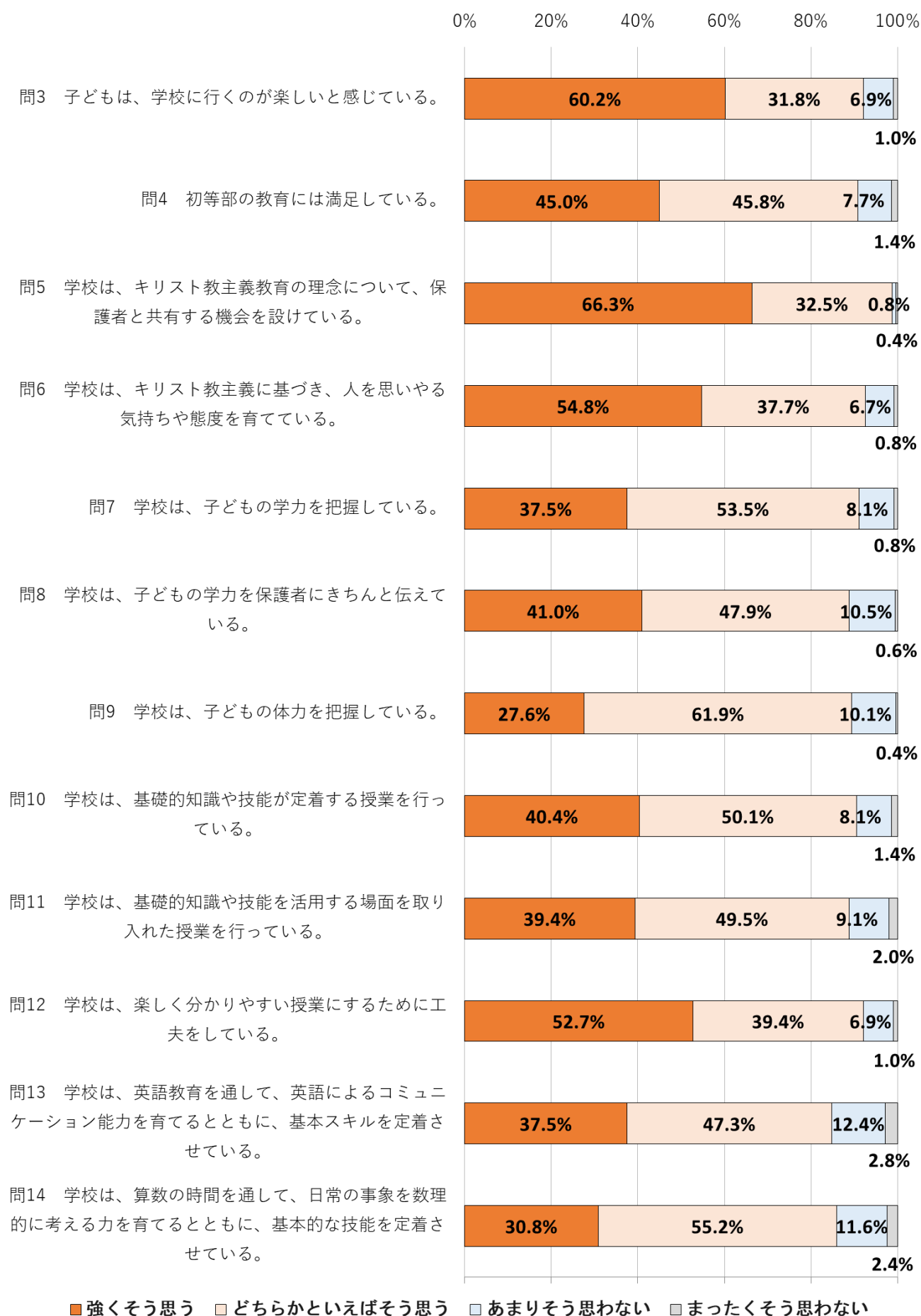
初等部・児童（回答率103.3% 回答373人/対象361人）

※複数回答いただいたケースがあり、100%を超える回答率となっています。

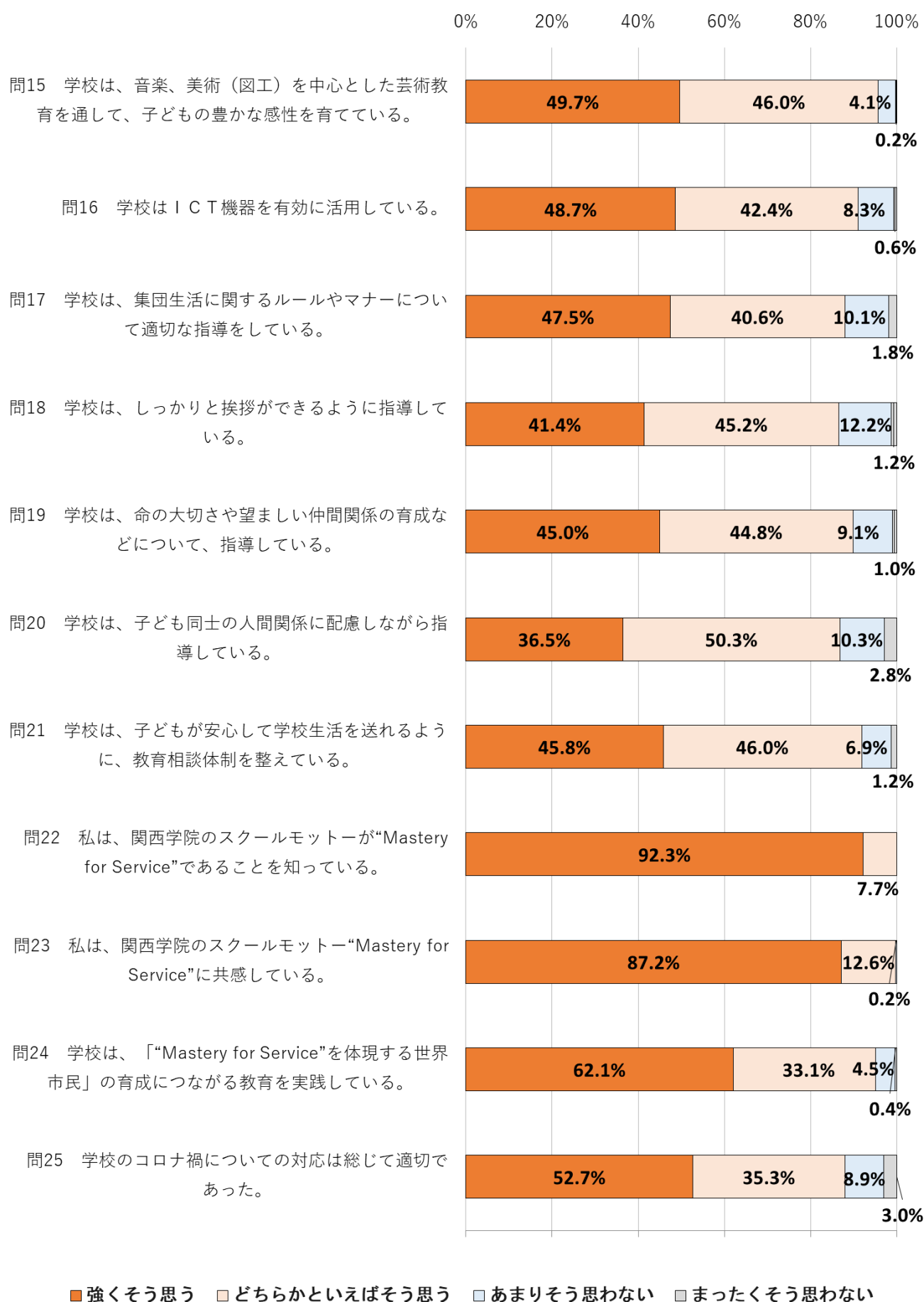


2022年度 学校評価アンケート集計結果

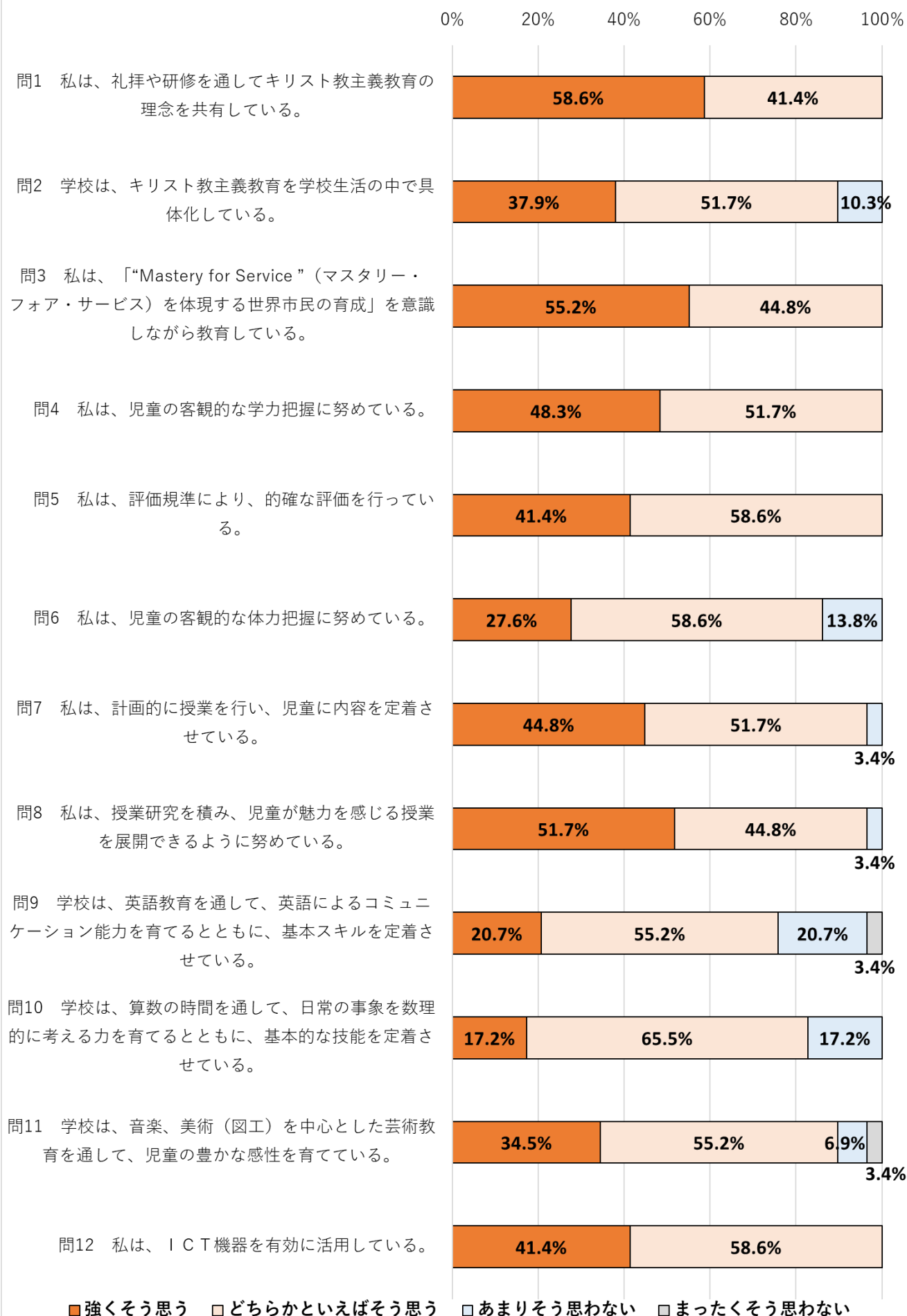
初等部・保護者（回答率 91.1% 回答493人/対象541人）



2022年度 学校評価アンケート集計結果 初等部・保護者（回答率 91.1% 回答493人/対象541人）



2022年度 学校評価アンケート集計結果 初等部・教員（回答率 100% 回答29人/対象29人）



2022年度 学校評価アンケート集計結果
初等部・教員（回答率100% 回答29人/対象29人）

